

氏名(本籍)	こ いずみ り え (栃木県) 小 泉 利 恵		
学位の種類	博 士 (言語学)		
学位記番号	博 甲 第 3879 号		
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Relationships Between Productive Vocabulary Knowledge and Speaking Performance of Japanese Learners of English at the Novice Level (日本人英語初級者における発表語彙知識とスピーキング・パフォーマンスの関係)		
主査	筑波大学教授		望 月 昭 彦
副査	筑波大学助教授		久保田 章
副査	筑波大学助教授		磐 崎 弘 貞
副査	筑波大学助教授		卯 城 祐 司
副査	筑波大学助教授	Ed. D. (英語教育学)	平 井 明 代
副査	千葉大学教育学部助教授	学術博士	西 垣 知 佳 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本人英語初級者(中学3年生と高校生)を対象に、「発表語彙知識」と「スピーキング・パフォーマンス」の関係を記述したものである。

本論文では、第1章において、英語のスピーキングにおける語彙の役割を検討し、更に、体系的に語彙とスピーキングの関係に焦点を当てた研究の必要性を説いて、本研究の意義を述べている。

第2章では、主に2点を扱う。第1に、先行研究における用語の定義をまとめ、本論文で使用する定義を示す。本研究で「発表語彙知識」とは、Laufer, Elder, Hill, & Congdon (2004)に基づき、「語の形式を再生する知識」である。発表語彙知識には広さ・深さの側面があり、本論文では両側面を扱う。Nakanishi & Shimamoto (2003)を修正し、広さを「中核的な意味と関連づけて、書記形式を筆記できる語がどのくらい多くあるか」、深さを「書記形式と関連づけて、中核的な意味以外の要素(派生語・反意語・コロケーション)を筆記できる語がどのくらい多くあるか」と定義する。「スピーキング・パフォーマンス」は、「モノローグで、準備時間がタスク開始前にない、記述・比較を行うスピーキング・パフォーマンス」を主に扱い、特に、「流暢さ・正確さ・統語的複雑さ・語彙的複雑さ」の4側面から分析を行う。第2に、語彙とスピーキングの関係を扱った研究を吟味する。先行研究は、(a)スピーキング・パフォーマンスの中での語彙を分析した研究と(b)語彙とスピーキングを別のテストで測り、比較した研究の2種類がある。本論文では後者を行う。後者の研究で既に示されている点は、語彙と「全体的なスピーキング・パフォーマンス」間や、語彙と「スピーキング・パフォーマンスの語彙の側面」間にある程度のある関係があることである。しかし、具体的にどの程度のあるかについては、各研究が対象としたスピーキング・パフォーマンスの要素や使用したテスト・指標が異なるため、一貫した結果が出ておらず、仮説を作りにくい。本研究は、先行研究におけるテストの妥当性や対象者の人数が少ないなどの問題点を克服して研究を行う。本論文は2つの研究からなる。

第3章では、「発表語彙知識の1側面(語彙の広さ)」と「スピーキング・パフォーマンスの4側面(流暢

さ・正確さ・統語的複雑さ・語彙的複雑さ)」の関係を調べることを目的とする、研究1の概観を行い、第4章から第6章で使用する研究方法をまとめる。

第4・5章では、発表語彙知識テストとスピーキング・パフォーマンスの指標の妥当性検証を行う。具体的には、Messick (1996) の枠組みに基づき、専門家の判断、テストの信頼性、タスク間の一貫性の観点等からテストを吟味し、肯定的な妥当性の証拠を提示する。

第6章では、「発表語彙知識の広さ」と「スピーキング・パフォーマンスの流暢さ・正確さ・統語的複雑さ・語彙的複雑さ」の関係を吟味し、以下を示す。発表語彙知識の広さが一貫して関連している側面は、統語的複雑さの1指標（話した語数÷AS-unit数）と語彙的複雑さの1指標（話した異なり語数÷v（語数））を用いて測れるスピーキング・パフォーマンスの合計2側面である。上記2つの指標は、語彙の側面（話した語数・異なり語数）が分子に使われる指標であることから、「発表語彙知識が多い学習者は、スピーキング・パフォーマンスにおいても語彙に関連した側面で優れる傾向がある」ことが示唆され、研究2で更に検証する。

第7章では、「発表語彙知識の2側面（語彙の広さ・深さ）」と「スピーキング・パフォーマンスの4側面（流暢さ・正確さ・統語的複雑さ・語彙的複雑さ）」の関係を調べることを目的とする、研究2の概観を行い、第8章から第12章で使用する研究方法をまとめる。

第8～11章では、発表語彙知識テストの採点方法の比較、発表語彙知識テストとスピーキング・パフォーマンスの指標の妥当性検証等を行う。具体的には、Messick (1996) の枠組みに基づき、受験者の回答分析、他のテストとの関係などの観点から、採点方法・テスト・指標を吟味し、肯定的な妥当性の証拠を提示する。

第12章では、「発表語彙知識の広さ・深さ」と「スピーキング・パフォーマンスの流暢さ・正確さ・統語的複雑さ・語彙的複雑さ」の関係を吟味し、主に以下の2点を述べる。第1に、発表語彙知識が多い学習者は、モノログで、準備時間がタスク開始前に無い、記述・比較を行うスピーキング・パフォーマンスを行う際に、延べ語数と異なり語数をより多く産出し、語彙に関係する側面をより良く産出する傾向が中程度または強い程度ある。この関係はタスクによっても変化する。どんなタスクで中程度以上の関連が見られるかについては、与えられた絵を表現するタスクなど、既に表現する内容が決まっており、定型表現を使うよりは、表現を自ら組み立てる場合に見られると考えられる。第2に、発表語彙知識の広さと深さがスピーキング・パフォーマンスに与える影響の検討では、傾向として、広さの影響の方が強いスピーキング・パフォーマンスの側面（あるタスクにおける正確さ）と、深さの中の反意語の知識（語と語の関係の知識）の影響の方が強い側面（流暢さの中の「話すスピード」）がある。この結果により、日本人英語初級者のスピーキング・パフォーマンスとの関連において、発表語彙知識の広さに加え、深さ、特に反意語などの語と語の関係の知識も重要な場合があることが示唆される。

第13章の結論では、研究1と研究2における結果と考察を総括し、教育的・方法的示唆等を述べ、本論文を結んでいる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまで体系的に語彙とスピーキングの関係に焦点をあてた研究が少ないことに着目し、日本人英語初級者（中学生・高校生）を対象として、語彙の中の話す際に使われる「発表語彙知識」(PVK)と「スピーキング・パフォーマンス」(SP)との関係を調べることを目的として、多くの指標を用いる2つの研究を実施し、詳細かつ精密に分析したものである。分析結果の解釈にあたっては、効果量、関連の強さを使う最新の統計処理の方法を採用している。英語教育学の論文は、*Publication Manual of the American Psychological Association* (5th ed.). (2001) (APAと略)に従うことになっているが、その本の中で、効果量 (effect size) 又は関係の強さ (strength of relationship) の指標を含めることが殆ど常に必要だと指摘がされ、一般的

な原則は、読者に統計的有意性だけでなく、観測された効果又は、関係の大きさの評価を読者に可能にさせるほどの情報を与えることだと記されている。日本における英語教育学の研究論文では、効果量、関係の強さがまだ、殆ど扱われていない現状から、本論文は、すべて、APAで求められている効果量、関連の強さを一貫して使用し、その先駆けとなっており注目に値する。研究1では、語彙の広さとSPの関係を調べるために、73人の中学生・高校生を対象として対面式の面接を行い、3つのタスクを与え、参加者の発話を全て文字化し、それを基に分析した。この時間のかかる文字化の仕事を丁寧に行った著者の熱心さに感心させられる。この研究により、語彙の広さが一貫して中程度以上の影響を与える側面は、統語的複雑さの1指標と語彙的複雑さの1指標により測れるSPの合計2側面であることがわかった。研究2では、語彙の広さと深さとSPの関係を調べるために、225人の中学生・高校生を対象として、5つのタスクについてテープ録音方式による半直接テストによる発話を全て文字化し、それを基に分析したが、PVKとSPの関係に関する研究で、これほど大量の初級者の発話を文字化して分析したのは世界でも珍しく、特筆に値する。

この研究で分かったことは、主に2点ある。第1点は、PVKが多い学習者は、モノログで事前に準備時間を与えられずに記述・比較を行うSPを行う時に、延べ語数と異なり語数をより多く産出し、語彙に関する側面をより多く産出する傾向が中程度または強い程度があり、この関係はタスクによっても変化することである。第2点は、PVKの広さと深さがSPに与える影響について、広さの影響の方が強いSPの正確さと、深さの中の反意語の知識の影響の方が強い側面（話すスピード）があることである。この結果により、日本人英語初級者によるモノログで準備時間を与えられない記述・比較のSPの関連において、PVKの広さの他に深さ、特に反意語などの語と語の関係の知識も重要であるということがわかる。また、PVKは、SPを4割程度説明できるという結果が出されているが、これはかなり大きな数値と考えられる。

本論文は、EFLの日本人英語初級者（中学生・高校生）を対象として実証的にPVKのSPへの影響を調べたことが注目すべき点であり、テストの妥当性、採点方法を緻密に検討することによって、日本人の初級者の発表語彙知識とスピーキングの研究において少なからぬ意義を有し、労作であると言える。しかし、若干の手直しと工夫が必要であろう。第一には、教育的示唆がありきたりであり、日本の中学生、高校生への具体的な指導方法の提言が欠けている。第二に、コロケーションの採点に関して、本論文では、自由連結を許容したために、その部分の分析結果が若干不明になってしまったので、habitually cooccurringと定義すれば、統計結果もすっきりしたものになったであろう。第三に、be, do, haveをすべて機能語として扱ったが、場面、意味に応じて、機能語・内容語の区別をすべきであろう。このような点を改善し、一層の精査と考察と工夫を施すことによって、学術論文として完成度が一層高まることを期待したい。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。